

「呼びなおす」

—初稿—

2026/5/13

雨森 れに

〈人物表〉

遠野圭子^{とおの けいこ}

(60) 愛の母親

秋山美紀^{あきやま みき}

(60) 圭子の友人

遠野愛^{あいの}

(36) 圭子の娘。性自認は男。晃弘^{あきひろ}と名乗る

遠野晃^{あきの}

(享年55) 圭子の夫。5年前に事故死

1. 遠野宅・リビング（夜）

一軒家の一般的なリビング。対面式ではないが、キッチンと隣接している。

ダイニングテーブルで向かい合う遠野圭子（60）と遠野愛（36）。愛は男性のような外見である。

圭子の前には手術同意書が置かれている。

圭子、顔を覆い、ため息。

愛、立ち上がり、圭子の横へ。

手紙を差し出す。

愛 「落ち着いたら、読んで」

圭子、顔をあげずに、

圭子 「愛ちゃん、どうしてもなの？」

愛、返事をせず、テーブルに手紙を置く。

そのまま静かに部屋を去る。

圭子、崩れるように突っ伏す。

2. 遠野宅・リビング（朝）

圭子、ソファで目を覚ます。身なりは昨夜のまま。だるそうに起き上り、キッチンへ。

3. 遠野宅・キッチン（朝）

一般的なキッチン。小窓から朝陽が差し込んでいる。

水道から勢いよく水が出ている。

圭子、雑に顔を洗い、袖で拭う。

水切りカゴからグラスを取り出し、水を飲む。

一息ついて、窓を見る。

目を細める。

4. 遠野宅・リビング（朝）

圭子、リビングに戻る。

部屋の隅にある、小さな仏壇を見る。

亡くなった夫・遠野晃（55）が写真の中で微笑む。

圭子、申し訳なさそうに目を伏せる。

視線をテーブルの上へ。

同意書の上には白い封筒がある。
宛名だけの、飾り気のない手紙である。
手に取り、ひっくり返す。

圭子の目が開かれる。

差出人として「遠野晃弘」の文字がある。

× × ×

圭子、テーブルにいる。服は着替え済み。

手紙を前に顔を覆ったり、頭が痛そうにしたり。

× × ×

テーブルに中身の入ったマグカップが置いてある。

圭子、別のマグカップを手にキッチンから戻る。

先にあったカップを見てうんざり。

× × ×

テーブルに空になったカップがふたつ。

圭子、まだ手紙を開いていない。

仏壇のほうを見る。変わらぬ夫の微笑み。

苛立ったように立ち上がる。

× × ×

圭子、テーブルに戻っている。

仏壇では遺影が伏せられている。

圭子、手紙を手取る。

改めて差出人を見て、一呼吸。

封を開けようと、ハサミを構える。

携帯電話が鳴る。テーブルの上で振動している。

圭子、反射的に電話に出る。

圭子 「もしもし。うん。え？ 今から？」

窓の外を見る。

すでに日が傾いている。

5.

ファミレス・店内（夜）

窓側のボックス席。店内は学生や家族連れが多い。

秋山美紀（60）、興味津々な笑顔。

美紀 「それで？ 読んだの？」

圭子 「その前にアンタが呼び出してきたんでしょ」

美紀 「それは失礼いたしました。で、手紙もってきてないの？」

圭子、テーブルの上に手紙を出す。

美紀、手紙を手取る。

美紀 「名前、アキヒロって読むのかな。晃さんから取って？
はあ、いい子じゃない」

美紀、封の隙間に爪を差し入れようとする。

圭子、慌てて奪い取る。

圭子 「開けていいって言ってないでしょ！」

美紀 「すぐ読んであげなっば」

圭子 「（大声で）だから、まだ落ちてないんだって！」

店内の注目が集まる。

圭子、慌てて口に手を当てる。

美紀、苦笑。

美紀 「ごめん。ババアになるとおせっかい焼きたくて」

圭子 「やめてよ。私もババアってことになるじゃん」

ふたりの空気が緩む。

子供の泣き声。離れた位置のテーブルからである。

4歳ほどの女の子が泣いており、両親がおろおろと
している。

女の子 「車がよかったの！」

と、おまけのおもちゃに文句を言っている。

圭子、その様子を微笑ましそうに見る。

圭子 「愛も、車とか恐竜なんかがよかったんだよね」

美紀 「それで圭子はどうしてたの？」

圭子 「選べるなら、選ばせてた。洋服とかも男の子用のでさ」

美紀 「私たちの時代でそれはすごいわ」

圭子 「でも、今回は話が違うでしょ。体にメス入れんのよ。お
もちゃとは違うの。体を変えるなんて。正直、怖いよ」

美紀 「私もそう思うよ」

圭子、驚く。

圭子 「美紀はどっちの味方なのよ」

美紀 「アンタら親子の味方。愛ちゃん？ 晃弘くん？ にも久
々に会いたいしね」

圭子、手紙を見る。

圭子 「恨み言書かれてたらどうしょ」

美紀 「なら読まないでおく？」

圭子 「それはない。けど、心の準備がね？」

美紀 「丸一日かけて、それはないでしょ。ぐだぐだしてたら死んじやうよ。私ら、もう60だよ」

美紀、けらけらと笑う。

圭子、つられて笑う。

女の子「ありがとうございます！」

先ほど泣いていた女の子が、店員におもちゃを取り換えてもらっている。周囲に笑顔の花が咲く。

圭子、鞆からハサミを取り出す。

6. ファミレス・外観（夜）

女の子がミニカー片手にはしゃいでいる。

母親に手を引かれ、歩いていく。

向かう先には父親の乗った車がある。

7. ファミレス・店内（夜）

圭子、外の様子を眺めている。

母親と女の子の手が硬く握られているのに気づき、

自分の右手を見る。

8. （回想）遠野宅・リビング（夜）

ソファーなどが寄せられ、棺桶が置かれている。

圭子、棺桶に突っ伏し、静かに泣いている。

愛 「お母さん」

圭子、顔をあげる。

愛が立っている。髪型はボブカットで、女性用の準喪服を着ている。

愛 「遅くなってごめん。明日から休み取ったから」

圭子 「愛ちゃん、愛ちゃん」

圭子、右手をのばす。

愛、近寄り、圭子の手を両手で受け止める。

愛 「私がいるよ」

圭子、ぎゅっと目を閉じる。（回想終了）

9. ファミレス・店内（夜）

圭子、目を開ける。

外の親子の姿はもうない。

テーブルの上には、開封済みの手紙。

圭子 「もっと早く言いたかったんだろうね」

美紀 「そう書いてあったの？」

圭子 「ううん。でも、父親が死んで、私も参っちゃって。言い出せなかったんじゃない？」

美紀 「ああ」

圭子 「『愛ちゃん』って呼ばれるのが苦しかったって」

美紀 「それ、いつからなんだろうね」

会話が途切れる。

圭子、美紀のカップを見て、

圭子 「コーヒー、持ってこようか。それともジュース？」

美紀 「それより、愛ちゃんに電話しなくていいの？」

圭子 「晃弘のこと？」

美紀、一瞬驚くも、すぐに笑顔。

美紀 「さすが、先駆けてるねえ」

圭子 「母親らしく手を引いてあげたいじゃない。子供に強がらせたまんまじゃ恥ずかしいし」

美紀 「ふうん。あの世の晃さんも安心だね」

圭子 「肝心な時にいなくて困ったもんだけどね。あっ」

美紀 「なに」

圭子 「遺影伏せたまんまだわ。なんか笑顔がむかついて」

美紀 「もういいから帰りなさいよ、アンタ」

圭子 「言われなくても。美紀はもうちょっとゆっくりしていきなね」

圭子、伝票を手に取り、去る。

10. 遠野宅・リビング（夜）

間接照明だけの薄暗い部屋。

コール音。

圭子、電話をかけている。

コール音を聞きながら、遺影を元に戻す。

愛の声「お母さん？」

圭子「次はいつ来るの？」

圭子、ふたつのカップをまとめて持つ。

11. 遠野宅・キッチン（夜）

流しにカップを置く。

愛の声「それって」

圭子「晃弘……の顔を見て、きちんと話したいなって」

水切りカゴからグラスを取り、水を溜める。

電話越しに微かな愛の泣き声。

圭子、優しい表情。目元には僅かに涙。

12. 遠野宅・リビング（夜）

圭子「うん。うん。待ってる。大丈夫だからね」

圭子、電話を切る。そのままテーブルへ。

椅子に座り、背もたれに体を預ける。

ゆっくりと目を閉じる。

おわり